

令和7年2月28日

中標津町議会議長 後 藤 一 男 様

中標津町議会議員 高 橋 善 貞

研 修 報 告 書

以下の視察（研修）について、次のとおり報告します。

- 1 視察名 文教厚生常任委員会道内視察
- 2 視察先 帯広市 帯広第一病院
- 3 視察日 令和7年1月27日（月）
- 4 視察事項 P N S看護方式について
- 5 成果（具体的に）

1974年（S49）に開設した公益財団法人北海道医療団「帯広第一病院」は、2018年（H30）よりP N S看護方式を導入し、当時、看護師離職率が30%を超える状況が令和5年度までは10%程度に改善されました。

しかし、現在は慢性的な看護師不足の中で看護方式を7：1看護から10：1看護へ移行する動きがあり、本来的に看護師育成メリットが大きいP N S看護方式も影響を受けており看護師退職の一因になっています。

町立中標津病院の看護師不足と早期退職防止対策として視察研修を行いました。パートナーシップのメリットは理解できましたが、現実的な看護師不足と看護師の雇用条件を考えると、2名による看護体制は確かに理想的ですが、早い段階でP N S方式発祥の福井大学附属病院に行って視察研修を行い、本制度を導入した帯広第一病院（民間病院）と町立中標津病院（自治体病院）の違いについて考えさせられました。

①看護師養成機関の不足

根室管内ゼロ・釧路管内4箇所（市立・労災・医師会・孝仁会）・十勝管内3箇所（帯広高等看護学院・帯広看護専門学校・医師会）・釧路根室管内は4箇所ある看護師養成機関卒業生の争奪戦を繰り広げている。

②看護師の地産地消

P N S方式発祥の福井大学附属病院は、福井大学医学部看護学科の卒業生である看護師・助産師・保健師の優秀な人材が確保でき、その他にも県内の条件の良い病院順に採用されている状態が過去から続いています。

また、十勝管内についても3箇所ある看護師養成機関に在籍中から、地元病院では「奨学金制度」「着任手当等」様々な雇用条件で看護師確保に躍起になっています。

ここに釧根地区の自治体病院が入り込むことは非常に厳しいと感じます。

③民間給与と自治体給与の格差

民間病院給与は労基法の範囲で独自決定が可能であることに對し、自治体病院給与は人事院勧告により条例化しており、給与改定は議会承認が必要なため民間並みの給与対策は非常に困難な状況下にあります。

研修で看護部長から提案があった自治体病院（公務員）の退職金PRは、現在、看護師不足を補うため常態化にある「奨学金合戦」「給与の高騰」「看護師引き抜き」に効果があるのか、今後の常任委員会で病院担当者と情報共有していきたい。



PNSの様子

4 視察事項 帯広市教育委員会 ひろびろチョイス

5 成果（具体的に）

不登校対策（現在380名）として「GIGAスクール構想」において、学校から児童生徒に貸与されているタブレットを活用し、仮想空間（メタバース）で自分のやりたい「学習」を選択（チョイス）して一定の時間を過ごし、この仮想空間で過ごした学習時間は学習相談員・学校・保護者の連携により出席時間として認められています。

仮想空間内は複数の参加者同士が自分の分身（アバター）により交流が行われおり、指導者は仮想空間ではない現実空間での参加者交流を企画するなど、参加者同士の対話を促し不登校からの社会的自立につなげています。



ひろびろチョイスの説明

令和5年「ひろびろ（教育支援センター）」からの開設で、令和6年120名の参加者があり、今後も課題はありますが「ひろびろチョイス」に取り組んだ帯広市教育委員会・帯広市教育研究所と現場の指導員（学校長退職者）の熱意には大変驚きました。

不登校対策にメタバースを取り入れたきっかけとしてGIGAスクールのタブレットに着目したのは、帯広市の学校現場において教員と児童生徒のタブレットの使用による学習が進んでいたことが大きな要因と思われます。

中標津町の現状は令和5年度の不登校の児童生徒は71人（小26人・中45人）であり、

中標津町教育相談センターには令和5年度に20件の相談が寄せられている。

適応指導教室「陽だまりルーム」は開設しているものの、令和6年10月末の登録者数は16人と少なく、ホームページすら開設されていません。

今後、帯広市のようにITCを活用した不登校児童生徒との「相談」「指導」「交流」について、タブレットを利用したオンライン学習等を図るとした場合、中標津町として学校間や教師・児童生徒でGIGAスクールを通じたタブレット学習の熟度にバラツキが無いように注視していく必要を感じました。

- 2 視察先 美幌町役場
- 3 視察日 令和7年1月28日（火）
- 4 視察事項 申込バス「もーびー」
- 5 成果（具体的に）

中標津町と同様に地域公共交通確保維持改善事業において検討してきたデマンド型交通について、先進地である美幌町の申し込みバス「もーびー」について、実施までの経過と現状について説明していただきました。

説明を聞いていて、事業の目的・必要性においての大きな違いは、中標津町は「公共交通の効率性」に力点を置いているのに対し、美幌町は「公共交通の利便性」を目的として進めてきたことが良くわかりました。



質疑の様子

中標津町はスタートから「運転手不足により2便廃止」から始まり、住民に不信感を与えた影響もあり、住民の意向調査のアンケートに依存したこともあり、本来的な意見交換や、事業者との協議検討が十分されていないため、事業の方向性をコンサルタント（公共交通アドバイザー）に依存しているように感じます。

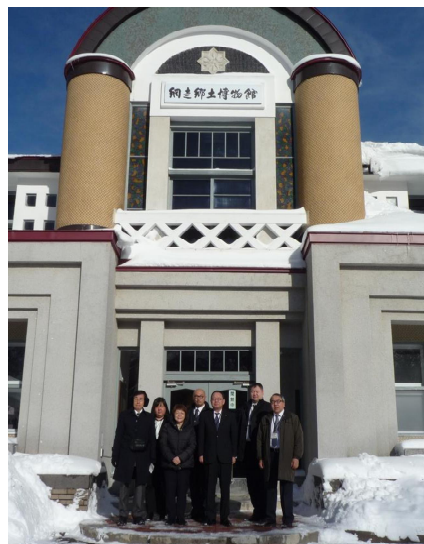
しかし、美幌町は住民説明会、事業者との意見交換、学校関係者との協議等を経て企画しているので、町民で自発的に組織された「公共交通応援団」が事業の後押しをしている状況にあります。

今後、中標津町においてデマンドバスの実証運行等をスタートする場合、最低限の住民説明、意見交換を実施するよう担当者に助言していきたい。

- 2 視察先 網走市
- 3 視察日 令和7年1月29日（水）
- 4 視察事項 網走市立郷土博物館・モヨロ貝塚館
- 5 成果（具体的に）

令和6年度からスタートした郷土資料収蔵庫整備事業、文化遺産を活かしたまちづくり推進事業に合わせて、道内最古（1936年S11年）の歴史がある網走市立郷土博物館とリニューアル（2013年H25）から10年目を迎えたモヨロ貝塚館の視察研修を行いました。

昨年10月31日、根室地方林活議連において羅臼町郷土資料館の研修で「重要文化財松法川遺跡出土品について」と題して羅臼町のオホーツク文化の詳細を学習しましたので、今回はオホーツク文化の発祥ともいえる網走市は中標津町が現在進めている郷土資料収蔵庫や将来的な郷土資料館（博物館）建設の参考となります。



歴史ある郷土博物館

現在、中標津町の埋蔵文化財包蔵地の登録は72箇所です。標津川・当幌川・武佐川に集中しておりますが、過去に千葉大学が2か所（当幌川遺跡・鱒川第2遺跡）発掘したのみでは、中標津町内の先住北方民族はオホーツク文化なのか、トビニタイ文化なのか検証を行うためにも郷土資料館建設までに埋蔵文化財包蔵地の発掘調査が必要と感じました。

学芸員の業務には資料収集、資料展示、教育普及、企画、案内等の他に「調査・研究」があり、その地域が持つ独自の文化を調査研究する重要な業務に対して予算付けがされていないのが現実で、網走市も独自の調査研究は手弁当とのことでした。

現在の学芸員の体制から、現在進めている「郷土資料収蔵庫整備事業」「文化遺産を活かしたまちづくり推進事業」に合わせて学芸員の増員を行う必要があります。

網走市では学芸員3名（1名会計年度任用職員）の他、会計年度任用職員8名で博物館等を運営しております。

新たに必要な展示物（剥製・レトロ家財等）については市民が寄贈してくれるそうで、博物館活動に市民を巻き込むことが必要との助言をいただきました。